

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.11 November 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



11

CONTENTS

・巻頭言

聖地におけるミニ巡礼

／井上 昭洋 1

・天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」 (14)

ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相③

／加藤 匡人 2

・台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (22)

戦後の台湾伝道庁復興に向けた動き

／山西 弘朗 3

・イスラームから見た世界 (31)

世界神学とは①—W・C・スミスの宗教論から

／澤井 真 4

・コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (最終回)

8. コロンビアへ！教えの伝播2「トゥマコと天理青年」

／清水 直太郎 5

・天理参考館から (37)

出雲人形と初瀬流れ

／幡鎌 真理 6

・ブラジルの宗教的風景 (新連載)

ブラジルの宗教と移民①

／中西 光一 7

・おやさと研究所ニュース 8

日本宗教学会第 83 回学術大会が天理大学で開催／第 370 回研究報告会 (9 月 25 日)／連載執筆のねらいと執筆者紹介

巻頭言

聖地におけるミニ巡礼

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

宗教にはそれぞれ聖地がある。キリスト教であればエルサレム、イスラームであればメッカ、仏教であればブッダガヤという名前が思い浮かぶだろう。信仰者にとって神聖視される場所が聖地であるが、山や滝、巨石や巨木といった自然物が神聖視され、その場所が聖地となることもあれば、特定の神、教祖、聖人にゆかりのある場所が聖地となることもある。また、聖地を訪れることを巡礼と呼ぶ。巡礼には、日本の四国八十八カ所巡礼（四国遍路）のように、長距離を徒歩で移動して複数の聖地を巡る回遊型の巡礼もあれば、エルサレムやメッカなど、一つの聖地を目指す往復型の巡礼もある。

巡礼の到達点である聖地では、その領域内でさらに幾つかの訪れるべき場所を巡る回遊型のミニ巡礼がなされることがある。エルサレムを訪れるキリスト教徒であれば、その最終目的の場所は聖墳墓教会であり、聖堂内のイエスの墓ということになるだろう。同地には「ヴィア・ドロローサ（悲しみの道）」と呼ばれる道があり、伝承に基づいて 14 のステーションが指定されていて、人々は順を追ってイエスにゆかりのある各ステーションを巡る（この行為もヴィア・ドロローサと呼ばれる）。イエスのゴルゴダの丘までの苦難の道のりを辿るミニ巡礼が聖地エルサレム中で行われるわけである。

一方、メッカであれば、巡礼者はマスジド・ハラーム（「メッカの大モスク」）の中心にあるカバ神殿の周りを反時計回りに 7 回まわり、次にモスク内にあるサファーとマルワという 2 つの小さな丘の間を 7 往復する。この 2 つの丘の間の往復（「サアイ」と呼ばれる儀式）は、アブラハムによって荒野に追われたハガル・イシュマエル母子の苦難を追体験するものとされる。また、仏教徒にとっての聖地の一つであるブッダガヤのマハーボーディ寺院の境内には釈迦が悟りを開いたとされる場所に菩提樹の聖木と金剛宝座があり、訪れた人は本堂

参拝後に本堂裏にある菩提樹と金剛宝座に足を運ぶ。金剛宝座は、釈迦が悟りを開いた時に座っていた場所にアショカ王によって置かれたとされる石盤である。とある事件が起こって以降、柵で囲まれて近づくことができなくなった。

巡礼は聖地を訪れ、そこで祈りを捧げることが目的である。一方、到達した聖地において行われるこれらのミニ巡礼の多くは、その宗教にとって重要な出来事を追体験する作業であり、祈りとは異なる角度から巡礼者の信仰を強化するものと言える。たとえその場所で一時の祈りを捧げるにしても、「ヴィア・ドロローサ」であれば、それはイエスの苦難に思いを馳せる儀式であり、「サアイ」であれば、息子のために必死に水を探し回った母を神が泉の場所にいざなったことを想起させる儀式であり、菩提樹の聖木の下で経を唱え、瞑想する行為は、釈迦の悟りに自らの信仰を重ねる行為である。聖地を目指す巡礼であれ、聖地内で行われるミニ巡礼であれ、巡礼の過程で人々は種々の経験をし、自らの信仰を振り返るのである。

ところで、天理教のおぢばがえりでは、どのようなミニ巡礼が行われるだろうか。まず、神殿、教祖殿、祖霊殿の三殿を巡る参拝が考えられる。その他の訪れる場所として天理教記念建物や豊田山のお墓を挙げるができるかもしれない。この 2 つの場所については、別の機会に触れることができればと思う。三殿参拝について考えると、回廊を歩いて各社殿を巡拝する行為は回遊型のミニ巡礼と言える。それは、神殿で参拝した後にその場から教祖殿と祖霊殿に向かって礼拝する行為とは異なるものだ。その点については別稿で言及しているので、参照されたい。

〔註〕

井上昭洋（2013）『『おぢば帰』の巡礼論』『現代社会と天理教《伝道参考シリーズ XXIV》』pp.167-183.